

日本語の発音

—アクセントその他—

秋 永 一 枝

I アクセント (accent) について

現在アクセントということばは、いろいろの意味に使われています。新聞をちょっと見ても「ワンピースの胸元にブローチなどでアクセントをつけて……」とか、「日まわりの花の間々に アクセントの 栗の穂をのぞかせて……」とかいった調子です。

「ことば」に限定して考えてもいろいろです。たとえば「話にアクセントをつけて……」という時は、「話の内容に起伏をもたせて」とか、「話の重要な部分をきわだたせて」とかいうような意味で使われるようです。また「日本語はどうもアクセントがなくて……」ということもよく聞きますが、これも「外国語とちがって抑揚がなくて」という程度の意味が多そうです。いつぞや東京新聞の 6 音 6 画で、京都生まれの森光子さんが書いておいででした。上京したばかりのころ、森さんはひまがあるとラジオなどでアクセントの勉強をされ、放送でアクセントをまちがえるごとに十円ずつ罰金をはらったそうです。それから 5 年後「私には外国語のようであった東京のことばも、いまでは日常会話となり「放浪記」で尾道弁、「悲しき玩具」で東北弁、「花咲く港」で九州弁など、おかげでほとんど日本国中のアクセントは使えることができるようになりました。」そうです。このアクセントということばは、どうとったらよいのでしょうか。これから解説していく「日本語のアクセント」という時の標準的な使い方——つまり、「個々の語について 定まっている 高低関係」という意味で森さんが書かれ

たのか、いわゆる「ことばの調子」という意味で書かれたのかです。おそらく、前者を少々含めた後者の意味ではないでしょうか。全国のアクセントを一語一語使いこなせるようになるなど、神業にも近いことですから…それほど日本語のアクセントは、地方によって違っています。といっても、英語やドイツ語のような強弱アクセントの地方があるというわけではありません。日本語のアクセントが地方によって大変異なるといっても、単語についてきまっているのは、どこを高くどこを低く発音するかという高低のきまりです。ただし日常会話では、重要な部分を強めたりすることもあります。それは、その時々により臨時に加わるもので、ふつう「プロミネンス」(prominence) とよんでいます。

さてその「日本語のアクセント」という時の標準的な使いかた—「個々の語について定まっている高低関係」—ですが、「名詞の型一覧表」をごらんください。(以下、表はすべて「明解日本語アクセント辞典」より転載)

たとえば東京方言で、「鳥」はトを低く、リを高く、次に助詞の「が」などがくれば高く平らに続けて発音します。ですから「トリ(カ[°])」の線のある部分は高く、線のない部分は低く発音するわけです。「牛、柿、口、端、水、飴、風、庭、鼻」や、三拍語の「桜、魚^{さかな}」、四拍語の「友だち、大学」などもこのグループで、これらの型を「平板型」とよんでいます。

ところが、「花」は、ハを低く、ナを高く発音するところまでは同じですが、「ハナ(カ[°])」のように助詞の「が」などが低くさがってつきます。この部分は — と同じく高く発音する部分ですが、次が低いことをあらわします。「花、色、山、足、犬、髪、川、旗、紙、弦、橋、冬」や、三拍語の「男、女」四拍語の「妹、弟」などもこのグループで、起伏式のうち、「尾高型」とよんでいます。

次に、「心」は二拍めのコだけを、「湖」はズとウを、高く、そのほかは低く発音するグループで「中高型」とよんでいます。

最後に「頭高型」とよばれるグループですが、これは、はじめの第一拍だけを高く、二拍めから低く発音します。

なお、表中の「が」は、「が、か、で、と、に、は、へ、も、や、よ、を」などの助詞を代表します。「の」はちょっと別で、尾高型に、高く平らに続く性質があります。 $\overline{\text{ハナカ}}$ 、 $\overline{\text{ハナノ}}$ (花)、 $\overline{\text{オトコカ}}$ 、 $\overline{\text{オトコノ}}$ (男) というふうにです。

こうなのが日本語のアクセントです。しかし、声の上がり下がりがイコールアクセントであると定義するわけにはいきません。たとえば、問かけのとき $\overline{\text{アメノ}}$ と語尾が上がりますが、これは「雨」という単語についてしまっているのではなく、その時その時に臨時に加わるもので、イントネーション (intonation) というものです。

先ほど、日本語は地方によってアクセントが大変ことなるといいましたが、「アクセント分布図」をごらんください。「東京式アクセント」「京阪式アクセント」「一型式アクセント」など、まことに複雑な様相を呈しています。

では、どんなふうにちがうかということですが、東京アクセントと、京都アクセントの例でくらべてみることにします。

東京アクセント	語 例	京都アクセント
$\overline{\text{ハナ}}(\text{カ}^\circ)$	(鼻, 飴, 風, 釜, 竹, 庭 牛, 柿, 口, 鳥, 端, 水(一類))	$\overline{\text{ハナ}}(\text{カ}^\circ)$
$\overline{\text{ハナ}}(\text{カ}^\circ)$	(花, 色, 山, 足, 犬, 髪(三類) 川, 旗, 紙, 弦, 橋, 冬(二類))	$\overline{\text{ハナ}}(\text{カ}^\circ)$
$\overline{\text{アメ}}(\text{カ}^\circ)$	(雨, 声, 琴, 鴛 秋, 猿, 鶴, 春(五類))	$\overline{\text{アメ}}$, $\overline{\text{アメカ}}^\circ$
$\overline{\text{イト}}(\text{カ}^\circ)$	(糸, 笠, 鎌, 空 糸, 海, 箸, 松(四類))	$\overline{\text{イト}}$, $\overline{\text{イトカ}}^\circ$

東京アクセントと京都アクセントの二拍語の名詞では、少数の例外をのぞいて上記のような類別の対応を示します。このように、一型式アクセント以外の地方では、アクセントの型こそいろいろですが、おおむね類別の対応をしております。そして、この類別は、古く、平安末期の京都アクセントまでさかのぼることができます。当時の京都方言では、二拍語名詞は

1 類から 5 類まで五種類のアクセントの型をもっていたことが古い文献などから推定されるのです。それゆえ現代の京阪アクセントは伝統的なアクセントと言えましょう。しかし「アクセント分布図」でお分り頂けるように、東京式アクセントの地域にくらべて分布範囲がせまく、使用者の数も少ないのです。もう一つ重要なこと、それは東京が首都になり、東京方言がいわゆる標準語の座を占めてしまったことです。京阪式アクセントや一型式アクセントの方々にはまことに申しわけないのですが、東京アクセントが現在いわゆる標準アクセントとされてきております。ですから、もし東京アクセントを身につけようとされる場合、御自分の「言語形成期」(5, 6 歳~13, 4 歳くらいまでの時期) がどこかということ、そして自分ほどのグループに属するかを知ることが先決問題です。先ほどものべたように、一型アクセントの地方をのぞいては、それぞれ東京アクセントとグループ別に対応する法則がありますから、一語一語のアクセントを丸暗記するよりも、グループ別に対応させて覚えていくほうが覚えやすいわけです。京都アクセントの方なら、二拍語名詞は先ほどの対照表で類推して頂けるかと思います。こうした対応は なにも 二拍語名詞に限ったことではなく、たとえば二拍語動詞だと次のようになります。

東京アクセント	語 例	京都アクセント
ナ ^ナ ク, キ ^キ ル	(泣く, 売る, 買う, 欠く, 聞く, 咲く) 言う, 着る, 為る, 寝る (一類)	ナ ^ナ ク, キ ^キ ル
カ ^カ ク, キ ^キ ル	(書く, 飼う, 切る, 裂く, 飲む, 読む) 会う, 来る, 出る, 見る (二類)	カ ^カ ク, キ ^キ ル

しかし、一型アクセントの地方では上記のような対応はなく、基礎になるアクセント感覚を持たないので、アクセントの習得はたいへんむずかしいことになります。そこでまずキ^キル(切る)とキ^キル(着る), カ^カウ(飼う)とカ^カウ(買う), ア^アメ(雨)とア^アメ(飴), ハ^ハシカ°(箸)とハ^ハシカ°(橋)とハ^ハシカ°(端)といったアクセントで区別のある語に注意してアクセント感覚を養い、だんだんにアクセント法則を覚えていく方法をとったらどうかと思います。つぎのよいことに、東京アクセントは法則が比較的是っきりしていて覚

えやすいという利点があります。

しかし、アクセントなど分らなくとも、いくらでも話は通じるじゃないか、という方もおいででしょう。それでは、アクセントはどんな役目を果たすか、それに触れてみます。

日本語には同音異義語が多く、その場合、単語でアクセントが異なれば、語の「意義のちがひ」を区別するのに便利だということが一つあります。
ツル(鶴)とツル(弦), カメ(亀)とカメ(甕), カキ(牡蠣)とカキ(柿), ヒニアタレ(日)とヒニアタレ(火)等々、前後関係がなくとも聞きわけることができます。私の友人で一型アクセントの人がいますが、時々話が食いちがいます。この間大事そうに紙袋をかかえていたので、「なあに?」というとき、「タビだよ」というのです。うっかり「白足袋でもはくの」というとき、さにあらず、雑誌のタビ(旅)でした。これで相手が京阪アクセントの人ですと、足袋はタビィ、タビカ、旅はタビとなるので私にもさっしがつくのですが……一型式は別として、東京式にしる京阪式にしる、アクセントは語の意義を区別するのに便利だということが言えます。もっとも漢語のように同音異義語が多いものは区別などできなくなります。たとえば「しせい」という語は広辞苑でひくと 25 語もあるのであります。

もう一つ、アクセントは、語と語の切れめを示す働きがあります。東京アクセントでは、高く発音される部分は一語のうち一か所にかたまっていますから、一語のうちに高い箇所が二か所以上出て来ることは原則としてありません。これは「この語が一語であるとか、二語であるとかいうことを示す」ものです。ただし「竜宮の乙姫の元結の切りはずし」(植物名)などという長い名詞は途中で切れましますから、例外になります。また東京アクセントでは、語の第一拍と第二拍は高さが異なるという原則があります。それは「ここが語のはじまりだ」ということをあらわします。スモモモモモモノウチのように、語と語の切れめに間をおかなくてもアクセントで語の切れめがわかるわけです。「名詞の型一覧表」をごらんくださっても、それらはおわかりになりましょう。この表で練習して東京アクセント

の型をしっかりとつかみ、それから「動詞の口語活用形のアクセント」や「形容詞の口語活用形のアクセント」へは行ってください。なお形容詞の表で《新は》とあるのは、若い層でこのごろ使われだした新しいアクセントですから、これから東京アクセントをマスターしようとなさる方はそれはぬかして練習してください。

次に、アクセント表記のいろいろな例をしるしておきます。

明解日本語アクセント辞典	日本語アクセント辞典	明解国語辞典	新和英大辞典	日本大辞書
昭 33. 三省堂 (金田一春彦) (秋永一枝)	昭 26. NHK	昭 27. 三省堂 (金田一春彦)	昭 29. 研究社	明 25. (山田美妙)
トモダチ	トモダチ	㊦	to ^l modachi	全 平
イモート	イモート	④	i ^l mōto ^l	第四上
ミズウミ	ミズウミ	③	mi ^l zūu ^l mi	第三上
ウケ ^o イス	ウケ ^o イス	②	u ^l gu ^l isu	第二上
コーモリ	コーモリ	①	ko ^l omori	第一上

なお、外国人向けの日本語教科書はローマ字表記のものがほとんどで、次のようなアクセント表示がしてあります。

	平板型	尾高型	中高型	頭高型
Learn Japanese (J. Young & K. Nakajima)	tomodacnī	otokō (男)	arigatoo	Hai (感動)
Modern Japanese (I. C. U.)	tomodaci	otokó	arígatoo	Hái
Essential Japanese (S. Martin)	tomodachi	otokó	arígatō	Hái
Beginning Japanese (H. Jordan)	tomodati, to ^l modati de ^l su	o ^l toko ^l	A ^l ri ^l gatoo	Ha ^l i

しかし、日本語教育で、アクセントをどの程度注意して教えるかということ、教科書にアクセントを注記するかどうかということには問題が多い

ようです。アクセント注記の教科書を使う場合、教師はそれが自分のアクセントと異なってもその通りに発音しなければなりません。(もち論、教科書の注記のミスは別です。) 同じ東京出身でも、年令とか環境によって多少アクセントのゆれがあります。たとえば^{エー}カ°と^{エー}カ°(映画)、カ^{ミナリ}とカ^{ミナリ}とカ^{ミナリ}、アカ^{トンボ}とアカ^{トンボ}のようにです。アクセント辞典には二通り 三通りのアクセントを注記することが可能ですが、教科書ではそうもいきません。その上、教師の言語形成期が東京以外の場合は、教科書通りに発音するには相当の注意と勉強が必要です。そこで、アクセント注記の教科書を使ってもアクセントを無視して教授されることが多いのではないかと思います。ですから、アクセント注記の問題は、その学校なり教師なりの教育方針によってきまるわけです。私などはせめて教師用ぐらいには注記したらと思うのですが我田引水でしょうか。

II ガ 行 鼻 音

次に、ガ行鼻音についてかんたんにふれておきます。「ガ行鼻音」の地図をごらんください。語中語尾のガ行音は、地方によりガギグゲゴと濁音で発音されたり(破裂音 [g])、カ°キ°ク°ケ°コ°と鼻濁音で発音されたり(鼻音 [ŋ])、ンガ、ンギ、ング、ンゲ、ンゴというふうに [g] の前に軽い鼻音がはいったりさまざまです。東京などはガ行音とカ°行音の混合地帯で、特に若い層では、^{ダイ}ガ^{クガ}、カ^{ギガ}というふうにすべてガギグゲゴで発音する傾向がふえています。

従来標準語では語中・語尾のガ行音はカ°行音で発音することを原則としてきました。(ただしその可否は別問題とします。) 昔は文部省でも積極的に国語の時間などにも教えたものですが、現在では音楽の時間にちょっとふれるくらいではないかと思います。NHK など放送関係では、今でもやかましくいっております。

東京人の中には、^{ダイ}ガ^{クガ}と破裂音で発音するのはキタナイカンジダ

という人が相当います。古い話で恐縮ですが、美智子妃殿下が婚約発表の記者会見の折、テレビにお出になりました。間もなくして「その対応はたいへんよかったが『イギリスのオミヤゲでございます』のようにカ°キ°グ°ケ°コ°のところをガ行音で発音したのでいやなかんじがした」というような国文学者と国語学者の投書が新聞にのりました。ところが、何か月かすると「妃殿下はすっかりカ°行音をマスターしておいでだった。さすがに大したものだ。」という投書がまたまた新聞にのり、「いや、そんなことは不必要だ」という学者もいたりでにぎやかなことでした。アクセントとちがいこちらは法則もはっきりしているので、覚えるのはずっと楽だと思います。

たとえば次のような法則があります。

- 1) 語頭のカ行音は鼻音化しない。

ガッコー(学校), ギンコー(銀行), ケアイ(工合), ゲタ(下駄),
ゴハン(御飯)
(ただし、助詞「が」「ぐらい」、助動詞「ごとし」などは鼻音化する。)

- 2) ①語中・語尾のカ行音は鼻音化するのが原則とする。

ガッコーカ°, カキ°(鍵), ウク°イス(鶯), オミヤケ°, ニホンコ°
(日本語)

- ②ただし、次のような場合は鼻音化しない。

- (a) 擬声・擬態語その他同音のくり返し

ガラガラ, ギラギラ, グズグズ, ゲラゲラ, ゴロゴロ

- (b) 数詞の五

ジューゴ(十五), ゴヒャクゴジューゴ(五百五十五)

ただし、数詞としての意義がうすれた熟語は鼻音化する。

シチゴ°チョー(七五調), シゴ°ニジュー(四五二十),

ジューゴ°ヤ(十五夜), キクゴ°ロー(菊五郎)

- (c) 軽い接頭辞の次にくる場合

オギョーキ°(お行儀), オゲンキ(お元気), ヒゴ°ホー(非合法), フゴ°カク(不合格)

ただし、敬語以外のものは両様の発音がみられることが多い。

- (d) 後部がガ行音ではじまる複合語で、複合のどあいの弱いもの

コート[○]ガッコー(高等学校), ニホンコ[○]ガッコー(日本語学校)

ただし、複合のどあいの強いものは鼻音化する。

ショーガ[○]ッコー(小学校), チューガ[○]ッコー(中学校)

なお、後部がカ行音ではじまる複合語で、連濁するものは鼻音化する。

スミダガ[○]ワ(隅田川), ウスク[○]ライ(薄暗い), コトコ[○]ト(事事)

- (e) 外来語もほぼ 1), 2) の ① の法則に準じるが、古く入った語(オルガ[○]ン, イキ[○]リス)や、原音がすでに鼻音のもの(スプリ[○]ンク, キン[○]ク)以外は特に注意して改める必要もないように思う。エゴ[○]イストでもエコ[○]イストでもよいと思う。ただし、後部が外来語のガ行音ではじまる複合語は原則として鼻音化しない。

マドガ[○]ラス, プロパ[○]ンガス, ケシゴ[○]ム

III 母 音 の 無 声 化

最後に、アクセントと関係のふかい母音の無声化についてかんたんにふれておきます。

まず、「母音の無声化」の地図をごらんください。この表に示したように、東京をはじめ多くの地方では、キ、ク、シ、ス、チ、ツ、ヒ、フ、ピ、プ、シュなどの音は、場合によって口構えだけで母音が発音されないことがあります。これを「母音の無声化」とよんでいます。これは、一拍ずついねいにゆっくり発音した時にはおきませんが、自然の発音ではふつうにみられる現象です。ただし、一口に無声化の多い地方といっても、東京と九州では無声化の度合も傾向も非常に異なるように、地方地方によっていろいろのあらわれ方をしています。東京方言では、これが軽快な感じを与えている要素の一つになっています。しかし、あまり無声化がすぎると聞きとりにくくなってしまうおそれがあります。

次に無声化の法則をざっとしておきます。なお、無声化の表記はキ、
△

いゝなどありますが、ここでは細字で示しておきます。

- 1) ①キ、ク、シ、ス、チ、ツ、ヒ、フ、ピ、プ、シュ等の音が、カ、サ、タ、ハ、パ行の直前(促音をへだてたときも同じ)にきた場合、母音が無声化する。

キ^ク(菊)、スク^ナイ^イ(少ない)、ツ^クル(作る)、ヒ^トリ(一人)、
フ^カイ(深い)、ピ^クピ^ク、ゲ^シュ^ク(下宿)、キ^ップ(切符)、
チ^ットモ

- ②(a) ただし無声化する拍がアクセントの高さの切れめにきたとき、無声化しない場合がある。

シ^シ(獅子)、チ^ッソ(室素)

- (b) ただし、無声化する拍が続くとき、発音の不明確さを避けるため、無声化の度合の弱い方を無声化しない場合がある。

シ^キフ^ク(式服)、キ^キツ^ケル(聞き付ける)、ス^スキ(薄)

- 2) キ、ク、シ、ス、チ、ツ、ヒ、フ、ピ、プ、シュ等の音が、息の段落の直前にきて、しかもアクセントの関係で低く発音される場合、無声化する。ただし、次にカ、サ、タ、ハ、パ行以外の拍が続くと無声化しなくなる。

ソー^デス、クロ^シ、カラ^ス、ソー^デスカ[°]、カラ^スト、カラ^スガ[°]

なお、母音の無声化とアクセントとは関係がふかく、無声化するためにアクセントの高さの山がずれることがあります。ですから、東京式アクセントの地方でも無声化の多い地方と少ない地方とでは同じ語のアクセントが異なることがよくあります。たとえば甲府ではキ^キシャ(汽車)、フ^ク(吹く)、キ^キテ(来て)と無声化せず頭高型に発音しますが、東京では無声化するために、アクセントの山が一拍ずつ後ろにずれてキ^キシャ、フ^ク、キ^キテと尾高型に発音するようになります。

なお、アクセント、ガ行鼻音、母音の無声化の法則についてもっとくわしくおしらべになりたい方は、「明解日本語アクセント辞典」(三省堂)の解説および習得法則をごらん頂きたいと思います。そのほか、田代晃二「標準語のアクセント教本」、「アクセント独習三十日」(創元社)や日本放送協会編「テレビラジオ新アナウンス読本」で練習なさるのもよろしいでしょう。なお、発音練習用のテープはただ今作成中です。